

introduction

本特集で取り上げる上腕骨外側上顆炎は有病率が3~4%とされ、80~90%が自然軽快するといわれています。従って、予後良好の疾患と考えられがちですが、果たして本当なのでしょうか。例えば、手根管症候群は上肢の慢性疾患では同じく common disease であって、ほぼ同等の有病率が報告されています。手外科専門医である筆者のところには当該疾患患者がある程度集積されて受診されますが、当院では上腕骨外側・内側上顆炎の患者のほうが多く受診しており、手根管症候群以上に common である印象を持っています。また、治療について両者を比較した場合、手術を要する割合は手根管症候群のほうが圧倒的に多くなりますが、保存治療例と手術治療例を合わせた overall の患者満足度は当院における集計では上腕骨外側・内側上顆炎において有意に低値でした。

「ある程度はよくなるけれど治りきらない」、「完治例はないことはないけれど少数」、「難治例もたまにはあるけれど手術はなかなか受け入れてもらえない」というのが上腕骨外側・内側上顆炎治療に対する筆者の印象です。ひと言で言うと、何をやってもキレが今ひとつというのが正直なところですが。同様の印象をもつ先生方は少なくないのではないのでしょうか。日本整形外科学会や関連学会の学術集会では毎回シンポジウムや教育研修講演がプログラムされ、本誌を含めた専門誌でも何年かおきに特集が繰り返されるのはその証左なのではないかと考えています。

そのようななかで、今回が取り上げるべき適切な時期と考え、上腕骨外側・内側上顆炎を特集させていただきました。本疾患診療のトップランナーの先生方に病態および各種治療について update した内容をご執筆いただきました。治療法については、現在わが国で施行可能な方法をほぼ網羅していると思われます。読者の先生方の明日からの診療に間違いなくお役立ていただける、キレをもたらしものと確信しています。

流山中央病院
國吉一樹